

作り物のいのち 中編

平成 25 年 1 月 19 日(土)

幻想譚工房

私たちがハワードと出会ってから一週間が経ち、効果測定の日が来た。効果測定は急遽新設された試験で、実地試験のために外へ出ても問題ないかをチェックするためのものだ。これはエインセルの島にある広い訓練場を使って一日がかりで行われる。私の事故が関係しているようで、この試験をパスしないと試験以外の用事でも島の外に行くことができなくなってしまった。私たちのような戦闘員に安全というほど似合わない言葉もないかもしれないが、少なくとも整備不良や誤作動で事故を起こすわけにはいかないといったところなのだろう。

訓練場は私たちが普段いる研究棟から一時間の所にある。私はこれから暑くなるであろう朝の陽気の中、舗装された道を列車の駅に向かって歩いていた。ソフィアは今日の試験で全員のサポートをするらしく、朝早くから訓練場へと向かっていった。プロジェクトに在籍している戦術士をはじめ空を飛べる者は多くが支援に駆り出されているようで、ソフィアも前日普段より 1 時間も早く起きなければならぬと嘆いていた。そしてクヴァレも準備があるからと書き置きを残し、私が調整室に向かったときには既に出てしまっていた。そして残された私が一人この道を歩いているというわけだ。

クヴァレはハワードと会ってから明らかに変になった。作業中時おりぼんやりと遠くへ心が飛んでいってしまうようになったのだ。ハワードが言いかけていた何かに関係しているんだろう。そのことに触れてみようと話しかけても、本人が話したくなさそうにはぐらかすものだからそれが何であるのか知ることはできない。クヴァレが自分から話してくれるのを待つことしかできない事に、すこしだけ歯がゆさを感じていた。

クヴァレは集合時間ちょうどに来ればいいとメモに残していたが、二人が早く出ているのに自分だけ時間ちょうどに行くわけにもいかないだろう。やり残したこともあるかもしれないし、何より調整のために早く出ていったクヴァレの手伝いをしたい。手早く支度を済ませると、すぐにクヴァレの後を追うことにしたのだ。

発着駅へ向かう道は多くの人で混んでいた。通勤や通学で混雑する時間ではあるものの、私のように研究棟から出て別の場所に向かうのは時間的に見て逆方向だ。もしかしたら私と同じように試験場に向かう人たちなのかもしれない。

そうだとしたらこのプロジェクトにこれだけたくさんの人が関わっているのか
と思い知らされる。クヴァレが言った通り、私を運用するのにたくさんの人や
資源がかかっていたのだ。クヴァレから話を聞かされたときには反発したが、
こういう状況をはっきりと目の当たりにするとどうして反発するのかと昔の自
分を叱ってやりたくなってしまふ。

「今日は頑張ろう」

そう小さく呟くと、駅への歩みを進めた。

試験場は正式名を広域軍事演習地域といい、普段保安庁が訓練のために使っ
ている地域だ。およそ 40 平方キロメートルの広大な地域に演習用の施設が点々
と建設されている。地域の多くが平原や山地で建造物は少ないが、主要な設備
は全て地下に埋められていると以前誰かから聞いたことがある。

階段を降り、地下の発着駅から列車に乗って集合地点である航空整備場へと向
かう。卯月など一部の例外を除いて、重量級の装備を身にまとう私たちは、一
旦地下の航空整備場で装備を身に付けた後で輸送班によって試験が行われるエ
リアまで運ばれることになっていた。

混雑気味の列車はぐんぐんスピードを上げて進んでいく。座れる席が無かった
ので、ドアの側に立って外の景色を眺める事にした。

広大な島の地下はかなり深いところまで大小様々な設備が入っており、1 階層
毎に地下を縦横無尽に走る列車がある。最寄りの駅で降りた後、乗り物を使っ
て目的の場所まで移動するのだ。

私たちのように地表に近い居住区から地上の建物まで向かう者もいれば、地下
深くで仕事をしている人の中には、ここ数年全く日の光を見ていないなんて人
もいるらしい。

地下といっても 1 階層の高さは中を航空装備で飛び回ることができるほどで、
人工の空が地下都市を照らしている。列車は階層の天井付近を走っており、一
階層下の風景を見下ろすことができるようになっていた。列車の窓から外を見
下ろすと、下層の建物の間を歩く豆粒くらいの大きさのエインセルや乗り物、
空中を移動しているエインセルがせわしなく動いていた。遠い昔はこの都市に
もたくさん的人类が住んでいたらしいが、ある日忽然と姿を消しエインセルだ
けが残されたと学校で聞いた。

昔の人類がどうしてこの都市から一人残らず出ていってしまったのかは分から
ないが、もし戻ってきてくれたら今まで以上に賑やかになるのだろうか。

「文月先輩、お久しぶりです！」

元気な声に振り帰ると、事故の時に私を島まで運んでくれたエミリーが駆け寄ってきた。数週間ぶりに見たエミリーはすっかり雰囲気が変わっていた。

「久しぶりだな、エミリー。もうすっかり仕事に慣れたみたいだな」

「いえ、私なんてまだまだです。ソフィア先輩にビシバシ教えてもらってます」最近忙しそうにしていたと思ったら、エミリーに指導をしていたのか。……それにしてもソフィアの指導がビシバシとは、一体どんな指導をするのか想像もつかない。

「航空班なのに空にいらなくて良かったのか？」

「はい、私は輸送班ということで直接皆さんのサポートをしますので、よろしくをお願いします！」

そう言うとビシッと敬礼をした。こんなところはソフィアにそっくりだな。やがて列車がゆっくりと減速し始め、車内音声が「航空試験場前」と告げた。駅に到着して扉が開いたが、混雑した列車の中から降りたのは私やエミリーを含め数人だけだった。

「降りるのは私たちだけなのか？」

「集合場所はここですが、実際に試験をするのが二つ先の駅辺りの場所なので、みなさんきっとそっちの方で降りるのではないかと思います」

「そうか」

駅を出ると、すぐ目の前に航空調整場と書かれた大きな建物があつた。入り口付近に睦月が立っていて、受付をやっているようだった。

「文月、よく来てくれた。調子はどうだ？」

「うまく動けるか心配だ」

そういうと睦月はわずかに表情を緩めた。

「うまくやる必要はないさ、模擬戦闘はあるが動作試験が今回の目的だから自分にとって最善だと思った行動を取ればいい。正常に動けるかどうかはこっちでわかる」

睦月の言葉を聞いて少しほっとした。実は少しだけ怖かったのだ。戦闘訓練でこの間のように失敗して、試験に落ちたらどうになってしまうのか。そんな思いが心の底で燻っていた。

「それに、外に出る資格を得ても主だった訓練は全部この訓練施設で行うんだ。新設するライセンスを得るまでは武器の使用も禁止になった」

「……やはり、私の事故の影響か？」

不意に睦月が真剣な表情になった。

「確かにそれもあるかもしれない。だが、人類の生活圏で活動する以上積極的に外へ出て見聞を広めてほしいと思っている。守るべき人類と交流して、人類

を好きになってほしい。ただそのためには、周囲に我々がエインセルであることを知られないために、何よりも君たちがケガをしないために、改造を重ねた体であっても安全に行動できることが大切なんだ」

「睦月……」

いつの間にかさっきまでの優しい表情に戻った睦月が、私の肩をポンと叩いた。

「さあ行った行った、中でクヴァレが待ちくたびれてるぞ」

中に入ると、既にメンバーの八割ほどが集まって調整や装備を始めていた。全員使う武器は違えど、ほぼ全員が中距離や遠距離から味方を援護する役割を担うのだ。

「みなさん、試験に向けて頑張ってますね」

パーティションで区切られた各々の作業スペースで着々と調整を進めるメンバーを見て、エミリーが感嘆の声を上げる。まだ来ていないメンバーも数人いるとはいえ、私はこんなに到着が遅くて良かったのだろうか。少しだけ焦りの気持ちがいじわりと沸き起こった。

「文月、早かったな」

遠くの方でクヴァレの声が聞こえた。どうやら端っこの作業スペースで準備をしていたらしい。

「遅れてすまない、クヴァレ」

「おはようございます、クヴァレ先輩」

「ああ、おはよう」

クヴァレはエミリーに軽く挨拶すると、あくびをしながら言った。

「もっと遅くても良いくらいだ、何もやることなく退屈してたんだ」

「……それじゃあこんなに早く出て何をやってたんだ？」

そういって、クヴァレは背後に積み上げられている装備の山を手で差して言った。

「今回の訓練では実弾を使わずに仮想システムを武器に組み込んで使うんだが、これの設定が案外早く終わってしまってな」

「すごいたくさんの装備ですね、これを全部つけるんですか？」

「そうだ、亀だからな」

クヴァレがニヤリとした顔で言った。

「ちょうどいいから文月にセットしよう、ちょっとここに立って両手を真横に広げてくれ」

クヴァレに促されるまま、高さ二メートルほどの C の字をした筒の中心に立つと、壁からたくさんのアームが伸びて私が普段身に付けてる装甲を外し始めた。

「クヴァレ……これは、大丈夫なのか？」

「じっとしてろ、すぐに終わるから」

……外してるのは外装だけで服までは取らないみたいだが、正面にある鏡は何とかならないものだろうか。普段身に付けてるものが無いだけでも少し恥ずかしいのに、ロボットアームに外されてる所を見なければならぬなんて恥ずかしさを取り越して軽く屈辱だ。

「おお……それでは私も集合があるのでまた後で」

背後からエミリーの声と離れていく足音が聞こえた。

「ちょ、ちょっと待て。おおって何だ！」

「じっとしてろ、前後ろに装備を取り付けられてしまうぞ？」

振り返ろうとした所をクヴァレに怒られた。仕方なく目を閉じて取り付けられるのを待っていると、身体中が徐々ににずしりと重くなっていくような感覚にとらわれた。全部で 10 分くらいかかっただろうか、プシューという音を立てて機械の動きが止まった。

「動いていいぞ」

クヴァレの言葉に目を開けると、見たこともない装備を身に付けた私がいた。体は装甲で覆い隠され、肌が露出する部分は全く無い。腰の辺りから伸びるアームは頑丈そうなものに置き換わっており、さながら人型より前に存在したと言われる戦闘型エインセルと読んでも差し支えないような見た目だ。

「そういや文月はこれを着けるのは初めてだったな」

「つける以前に見るのも初めてなんだが」

「そうだったか。そういえば事故起こす直前に物が届いて入院してるときに打ち込み終えたものだから見るのが初めてでも仕方ないかもな」

「……」

この男、やっぱり入院中も仕事をしていたのだ。

「た、ただ寝てるだけじゃ時間をもったいないだろう。そんな目をするな」

「……端末はどうやって操作していたんだ？ 両腕は使えなかったと思ったがまさかクヴァレの事だから口で操作するなんて事はないと思うが、両腕の無いクヴァレがいったいどうやってデータの打ち込みをしていたのか気になる。」

「肩のプラグに小型の補助アームをつけて操作してたんだ」

「肩のプラグ？」

エインセルには体の要所にいくつかプラグがあり、そこに様々なパーツを増設することができる。人に交わって生活する者にはほとんど使用することの無いものだが、逆に人の前に姿を表さないような者の間では使わない者はいないほど当たり前の機能で、私もここに来るまでに地図データの入ったユニットを腕のプラグに着けてきた。ソフィアは見た目が悪くなることを嫌ってつけたがらないが、この間ペリカン対策といってレーダーユニットを取り付けてきたこと

があったな、人混みの中でレーダー波を飛ばすものだから通信管理部に閉塞かけられて散々な目にあったようだったが。

私達のような戦闘員や特殊任務にあたる人たちの装備にもプラグを介して取り付けるものが多く、特にセンサー系ユニットはプラグを使って給電とデータのやり取りを行っている。

そんなわけでクヴァレは腕の代わりに補助アームをつけて作業をしていたようだ。それを聞いてがっかりしたような、ほっとしたような複雑な気持ちだ。クヴァレらしい回答だったが、意外なやり方だったら面白いと思って期待していたのだ。口とか。

「その残念そうな目は何だ、俺が口で端末を操作するとでも思ったのか？ 残念だったな、期待に添えなくて。でもまあ、そのやり方も一瞬思い浮かんだことは否定しない」

その辺はさすがクヴァレと言ったところか。

「アーム繋がりでもうひとつ。これから行動をするときには今回の装備が基本になるわけだが、それらの着脱はこの装置が担当するからな」

「……つまり事ある毎にたくさんのアームに剥かれるんだな」

「まあ、そう言ってくれるな。この装置は装備を手で身に付けるより短時間で正確に装着することができる。文月みたいな重装型にはとっておきだろ」

「それは、そうだが」

事故を起こしたときには短い制限時間の中手作業で装着したこともあって、同じ時間で武器しか身に付けることができなかった。ジェネレータの爆発はさておき、ライフルがやたら重く感じたのは腰部アームにパワーアシストを付けなかったからだったことがわかった。

「それに、ここのメンバーは装備が特殊だから、ほとんどの人がこれを使うんじゃないか？」

「何これっ、こんな気持ち悪いのに入ってやるものですか」

隣の壁から卯月の叫び声が聞こえた。